

## ■ 田崎悦子ピアノリサイタル



ニューヨークスタインウェイでの演奏=写真 高嶋 ちぐさ

ニューヨークを拠点に活動を続けてきた田崎悦子が二〇〇六年から三年がかりで展開しているシリーズ「田崎悦子ピアノ大全集」。その第四夜「ピアノの詩人達」は、ショパンのノクターンとマズルカ、幻想ポロネーズにリストのソナタというプログラム。田崎自身が書いたプログラムノートを読むと、ショパンは若い頃から得意ではなかったようだが、今回「私の」ショパンを「外に出してみよう」と思い至ったらしい。

### 「らしくない」ショパン 真剣勝負

じさえするフレージング、独特のペダリング。音楽大学の学生が真似したら怒られそうなスタイルだが、しかし彼女が表出する音楽の本質は、並大抵のピアノニストに真似できる類のものではない。一音一音に自身の人生そのものを投影させるかのような演奏は、聴き手の心の奥底までも鋭くえぐり出す。近年、これほど真剣勝負で聴かなければならないショパンに巡り合ったことはなかった。

後半のリストのソナタはさすがに自家薬籠中のもの、聖なる祈りへと昇華する大河の流れのような作品世界を存分に描ききって、聴衆の感動をさらった。

今回使われた楽器は、一九二五年製のニューヨークスタインウェイのコンサートグランドピアノ。その硬質で無駄のない響きを存分に活かした演奏だったのも特筆に値する。5月23日、東京文化会館小ホール。

(音楽評論家

室田 尚子)